



繊維産業の地域ブランド化 促進のための調査研究事業報告書
 平成18年3月 制作発行:財団法人中部産業活性化センター
 財団法人 中部産業活性化センターが財団の調査研究事業として行った
 もので、伊藤はコーディネータとして全計画・実施に加わったものの報告書
 である。

平成17年後期より始めたプロジェクトである。アパレル産業の盛んな岐
 阜地区も生産基地の海外流出、安価な海外製品の日本進入など多くの問題
 点を抱えた、産地としての危機に立っている。そこに於いて岐阜のアパレル機
 能が今なら残れる、今なら岐阜発の製品を作ることが出来るという、危機感
 はあるがその中にあるわずかな期待感を実現化に持っていこうという計画
 を立て、勉強会・ワークショップを開催し、岐阜地区の青年たちを中心に啓
 蒙活動を行った。岐阜市立女子短期大学生活デザイン学科の学生は勉強
 会・ワークショップに参加して、一緒に勉強し、情報を共有している。



繊維産業の地域ブランド化 実現のための調査研究 地球の糸 報告書
 平成19年3月 制作発行:財団法人中部産業活性化センター

昨年度につづき、岐阜アパレル青年部とともに、新たなブランド「地球の糸
 」の立ち上げをめざして、活動した。伊藤はコーディネーターとして、また、「地
 球の糸」設立メンバーとして、学を率いるものとして、デザイン提案の一員と
 して参加した。このブランドの特徴は大正紡の近藤健一氏の開発した「天然
 素材」オーガニックにこだわった糸を使用、原料の生産者から最終商品まで
 のトレーサビリティを重視したものである。この糸で作成されたテキスタイル
 を用い「地球の糸」としての製品デザインを行い、生産・販売していくもので
 ある。また、産・官・学の連携で行うという特長を持つ。岐阜県・岐阜市の助
 成を受けサンプル作成、ブランド登録、IFF出展を行った。岐阜市立女子短期
 大学は伊藤のゼミ生を中心に、ライフスタイルやトレンド情報等のファッショ
 ンマップを作成、またデザイン提案に参加している。

この活動報告が出されたことにより、消費者、市場、繊維産業関係者から、
 非常に興味をもたれた。19年度は販売体制をどう整えるかが課題となっ
 ている。 (伊藤 陽子)

シルクロード・プロジェクト2007
 —芸術・生活文化を通しての交流—の旅を終えて



発足地 奈良、東大寺前の出発時



終着地 ローマ、コロッセオ前



キルギス国立美術館 現代テキスタイルアート展



中国・騰冲山を行く



中国、ウイグルのダンス風景

2007年は中国との国交正常化35周年、キルギス他、中央アジア諸国と
 の国交樹立15周年の節目の年でもありました。2008年は中国でのオリンピ
 ックが開催され、2010年には続いて上海万博も準備されています。中東で
 の争いこともさることながらトルコ、インドをはじめ台頭する東南アジア、中
 央アジア諸国の動向も活発であります。今、世界の関心がアジアに向けられ
 ているのを感じますが、同じアジア圏内に位置する日本の私達は本当にアジ
 アを理解し把握しているのでしょうか?隣国の韓国や中国でさえ本当に理解
 しているとは云い難いでしょう。「アジアと西欧の境はどこですか?」「アジ
 アには何ヶ国位の国がありますか?」「中央アジアと呼ばれる国の名を挙げて
 みて下さい」こんな質問をしてすぐ答えられる人は少ないと思います。云い換
 えればそれ程アジアを知らないのです。アジアを知ることは日本を見直すこ
 ともなり、改めて世界を見直すことにもなるのではないのでしょうか。

このような思いの中で「シルクロード・プロジェクト2007—芸術・生活文
 化を通しての交流—」は実行されました。戦後の平和の代償として安住ボケ
 した日本人が安易な錯覚をしている間に時代の変化は加速し、日本の存在
 が後退しはじめているのに気付かない人も多いようです。ビジネスも相互理
 解と共存がなければ行き詰りとなるでしょう。政治に国境は付きものですが、
 芸術や文化には国境はありません。人と人のヒューマンな触れ合いが本当
 の相互理解を育て、明日の共栄につながるのではないのでしょうか。その道
 のりは遠いかも知れませんがそれぞれ可能な立場で実行して行かねばと思
 います。シルクロードの東の終着地といわれる奈良を発足地と決め2007年6
 月28日、東大寺大仏殿での法要の後、翌日6月29日神戸港を出国旅立ちま
 した。船が静かに動き出し脚に沁み入るような船笛の響く中、手を振る見送
 りの人達が遠のくのを目で追いながら「無理だよ」「無謀な計画だよ」とい
 われ続けた日々を想い出し、とうとう旅立ちの日を迎えることが出来た喜びと、
 旅に向う希望と不安が一挙に吹き出し、しばらくは茫然とデッキに立ちつく
 していました。

それから90日西の終着地ローマに至る約25000キロに及ぶ地上の旅
 の日々は決して平坦なものではありませんでしたが、何とか各地での交流プロ
 グラムをこなし、予定の交流を実行し成果をあげることが出来たことは各大
 使館、地元関係者をはじめこのプロジェクトを支援、協力して下さった方々
 があつたればこそと感謝の念でいっぱいです。参加隊員は推薦と公募によ
 る女性のみ、部分参加を含めて総勢18人。私を最年長に次が65才、そして
 50代、40代、30代、20代とそれぞれの年齢に分散、最年少は20才の大学
 在籍の3年生でした。18人のうち12人までが20~30才代の若い人であつ
 たことは次の時代の担手として夢を託したい私にとって大変嬉しいことであ
 った。